

# 展示室における観客の観覧行動と記憶および理解に関する研究

近世展示の展示評価結果から

---

## Research Notes

竹内有理

### はじめに

1920年代から30年代にかけてアメリカで実施され、その後、欧米の博物館において発達してきた展示評価や来館者研究が、近年、わが国においても関心を集めるようになった。研究も実践もまだ緒についたばかりであるが、このような関心の高まりは、博物館が作り手中心の考え方から利用者中心へと変化していることの表れでもある。利用者と博物館の接点となる主たるものは展示であるが、従来のような観客に対して直線的で一方の情報伝達ではなく、観客みずからが解釈や意味づけを行っていく双方向性や構成主義の考え方が重視されるようになってきたこともその背景にある [Hooper-Greenhill 2002, フーパーグリーンヒル 2003]。

国立歴史民俗博物館（以下、歴博とする）においても、展示のあり方や観客が展示をどのように観ているかについて、館内の研究者により自己批判がなされ、展示を作る側と観る側の認識の違いについても指摘している [久留島 2001, 篠原 1988, 橋本 1998]。また、第三者評価の報告のなかでも、総合展示の内容や展示手法について批判的見解が述べられている [国立歴史民俗博物館 1998]。このように、展示を作った側が意図した通りには観客は展示を観ていないことは、経験的には理解され、語られてきている。しかし、本当にそうなのかどうかを立証するデータにもとづいた分析は行なわれていなかった。本論文で扱う調査は、実際の観客の行動や意識を観客から直接聞き取ったり、観察して集めたデータをもとに、観客が展示をどのように見て、理解しているかについて、分析を試みたものである。実証するのに十分なサンプル数では必ずしもないが、観客の展示の見方についてある程度傾向を把握することはできた。

本論文では、国立歴史民俗博物館において実施した近世展示の展示評価調査の分析結果をもとに、現状の展示の問題点と可能性について整理し、観客調査の導入の意味とその方法について考察する。なお、展示評価 (evaluation) と研究 (research) は、目的とするものと方法が異なることが指摘されているが [Bicknell and Farmelo 1998]、本論文では展示の改善とリニューアルを目的に行った評価 (evaluation) の結果を報告するとともに、そこから導き出された観客の展示の見方に関する普遍的な傾向や展示そのものが持つ特性、さらに調査方法そのものについて考察する。

### 1 第3展示室における展示評価の実施の背景と目的

本論文で取り上げる調査は、江戸時代の都市と農村、庶民の暮らしなどを扱った第3展示室の展示について、観客の視点から検証するものである。いわゆる総括的評価 (Summative evaluation)

---

にあたるものであるが、すでに述べたように、この調査の結果は、現状の展示の改善と現在検討している展示更新のための参考データとして利用される予定である。調査者は展示評価担当という立場で展示更新計画に係わっている。したがって評価と展示の企画は別の者が担当している。調査方法については、観客調査担当である筆者と展示企画担当者、そして観客調査に関心を持つ教員との間で協議を行ったうえで、調査方法を決定し実施した<sup>(1)</sup>。第3展示室の評価調査としてまず着手したのが、現状の展示を観客がどのように見ているかについて分析することであった。具体的にこれらの調査を通じて明らかにしようとしたことは、第一に、どの展示が観客の興味関心を強く引きつけているのか、反対に、観客の注目度が低い展示は何か、第二に、展示の企画者の意図と観客の興味関心や認識にどのようなギャップがあるか、第三に、観客を引きつけやすい展示とそうでない展示を分けるものは何かを明らかにすることである。

そこで以下の3つの調査を行った。

- ①動線調査
- ②記憶・理解度調査
- ③教師から見た評価

①は観客の展示室内における観覧動線を追跡するトラッキング調査である。展示評価において広く行われている代表的な手法の一つでもあり、先行事例などを参考にして行なった [三木美裕 2000, Diamond 1999]。今日、博物館での体験が長期的にもたらす影響や観客自身の多様な解釈のあり方など、一人一人の内面に迫ったものに目を向けようとする文化的アプローチの重要性が指摘されており [John and Lynn 2000]、観客の外形的な行動から判断しようとする行動主義の考え方そのものに対して批判も向けられている [John and Lynn 2000, Hooper-Greenhill 1999]。しかし、多面的に観客の体験を分析するためには、複数の評価方法と組み合わせ、その一つとしてトラッキング調査を行なうことは有効であると考えられる。

②は観客の行動を裏づけるデータにもなるが、展示が観客の記憶や理解にどのような作用を及ぼしているかを分析するものである。

①と②の調査で分析した観客の観覧行動と反応は、観客の行動→記憶→理解という順に徐々に、外見的な行動分析から観客の内面に迫った分析になっている。動線調査は行動観察によって得られるデータであるが、記憶・理解度調査は、行動からだけではわからない観客の内面に起こったことを分析するものなので、被験者一人一人に質問し、その回答を分析することになる。観客の〈行動〉、〈記憶〉、〈理解〉の3つの側面から量的、質的な分析をすることによって、観客の展示室での体験をより総合的に捉えることができると考えた。

③は小中学校の教師に教える立場から展示を評価してもらうことにより、児童生徒が展示を見学する際に、現行の展示が持っている問題点と可能性について探るものである。①と②が展示を観る側がどう観ているかを検証するものであるのに対し、③の教師から見た評価は、展示を観客に伝える、あるいは展示を教育素材として使う立場の人間がどう評価するかということに主眼を置いている。

本論文では、①動線調査と②記憶・理解度調査、すなわち展示を観る側＝観客の見方について取

り上げる。展示を伝える立場、使う立場からの「教師から見た評価」の詳細については、機会を改めて報告したい。

## 2 動線調査

### 調査の方法

第3展示室は「百姓の世界」「都市の繁栄」「道と旅」「躍動する民衆」の4つのコーナーから構成される主室と、「文書と絵図は語る」というテーマ展示である副室から成っている<sup>(2)</sup>。強制導線にはなっていないが、第3展示室の入口から入った場合、「百姓の世界」→「文書と絵図は語る」→「都市の繁栄」→「道と旅」→「躍動する民衆」という順番で見学するように展示が構成されている。

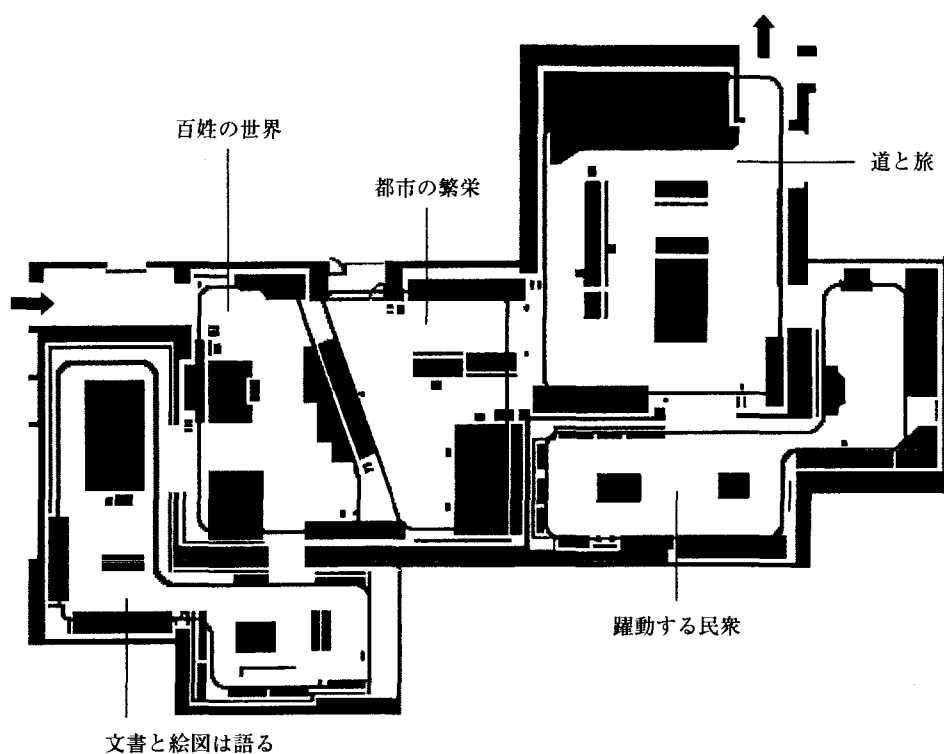


図1 第3展示室の展示構成

動線調査では、第3展示室を「百姓の世界」「都市の繁栄」「文書と絵図は語る」のコーナーから構成される前半部分と、「道と旅」「躍動する民衆」のコーナーから構成される後半部分の2つに分けて、観客の観覧行動を観察した。観察内容は、観覧ルート（動線）を追跡するもので、調査シート（図2）に動線とともに、立ち止まった地点には○を、じっくり観ていた地点（約5秒以上）には●を記録していった。調査シートにはこの他に、補足情報として観客の入室時間と退室時間、そこから算出される滞留時間、被験者の性別、年齢層（小中・高大・大人・高齢者）、同伴者とその構成、特徴的な行動について記入した。調査対象は、年齢を問わず、観客すべてとし、同伴者がいる場合はその中の一人を選んで追跡した。ただし、親子クイズをやっている人は、クイズの問題によって動線が左右されるので、調査の対象から外した。

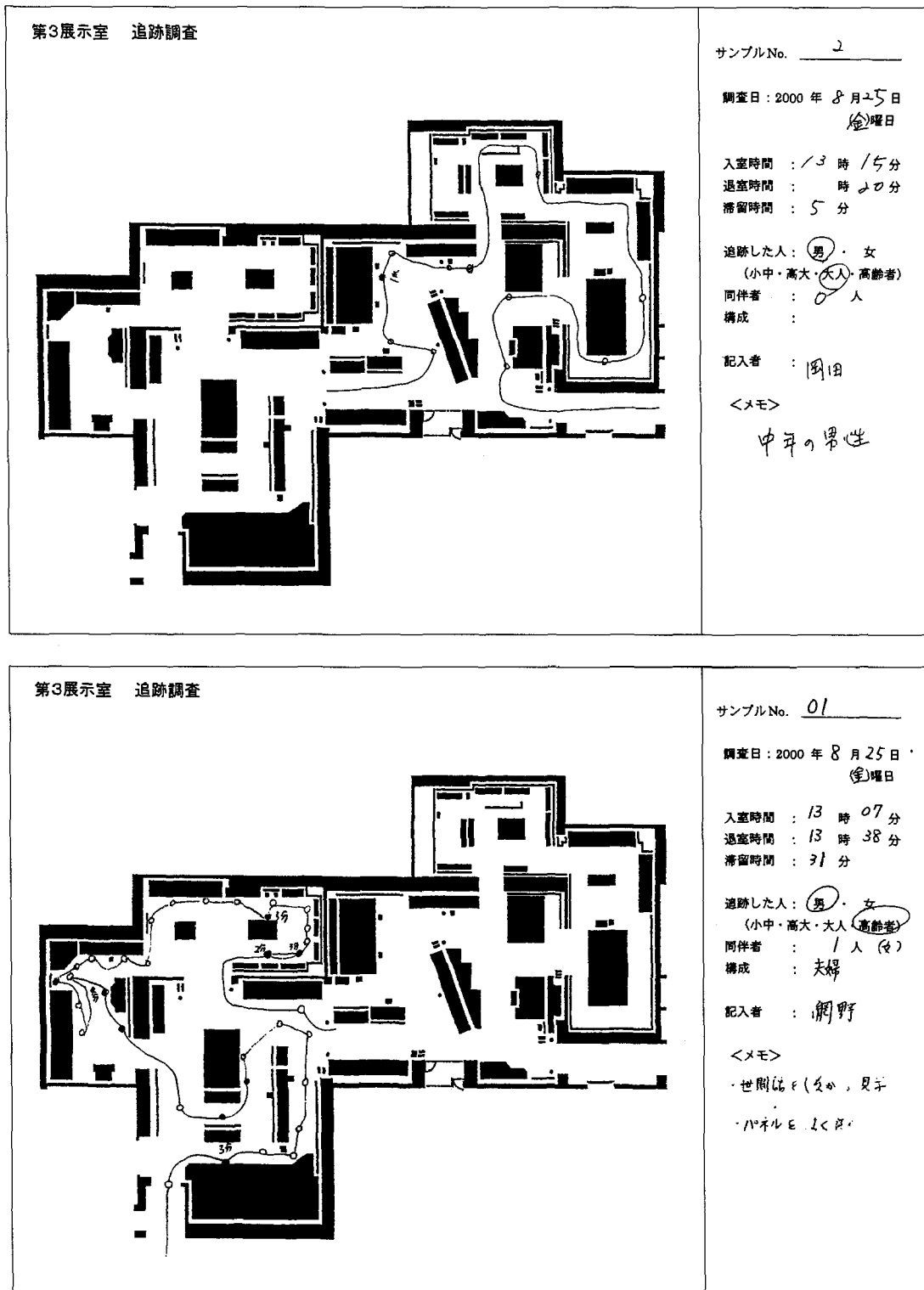


図2 動線調査の調査シート

調査は2000年8月25日(金)の13:00~16:30と8月27日(日)の11:00~15:00の2日間にわたって実施した。収集したサンプルは2日間合わせて展示室前半部分が75件、後半部分が68件だった。

この調査は、非参与型の行動観察であるため、被験者には行動を観察していることを直接伝えてはいない。展示室の入口に調査の趣旨と調査を実施している旨を書いた看板を立て、告知する形をとった。しかし、観客の自由な観覧行動を観察し、記録することについては、倫理的な問題も孕むため、調査を実施する前に、観覧行動を観察していかどうか観客の了解を得ることが望ましい。観客には拒否する権利も当然あるのだから、そのような手続きを踏むべきであった。今後はこうした手続きを踏んだうえで調査にのぞみたい。

### 調査結果

分析にあたっては、展示室前半および後半部分の滞留時間がそれぞれ3分以上の被験者を分析対象にした。したがって有効サンプル数は、前半部分が61件、後半部分が54件となった。動線調査の結果を以下の側面から分析してみたい。

- ①第3展示室に入って最初に向かう展示は何か
- ②副室（文書と絵図は語る）に入ったか。副室にはどのようなルートでいったか。
- ③展示物および展示コーナーごとの注目度
- ④観覧動線

#### (1) 第3展示室に入って最初に向かう展示は何か

第3展示室に入って、観客が最初に立ち止まる展示で最も多いのが、井門村耕地模型（写真1）で、被験者の46%がこの展示の前で立ち止まっている。次に多いのが「農具と労働」の展示（写真2）で被験者の29%がこの展示の前で立ち止まっている。その次が「用水の確保」（写真3）についての展示で13%となっている（図3）。

展示室に入っすぐ右側にある井門村耕地模型は、どのように田に水を引いたかを稲の発育状況に合わせて示した模型であるが、ボタンを押すと水の流れに合わせて緑色の電気が点滅するように

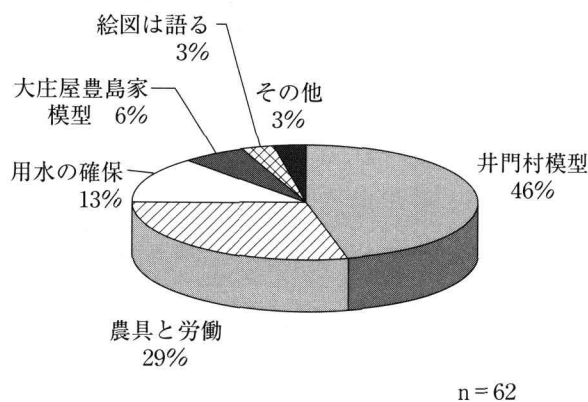


図3 展示室に入って最初に向かう展示

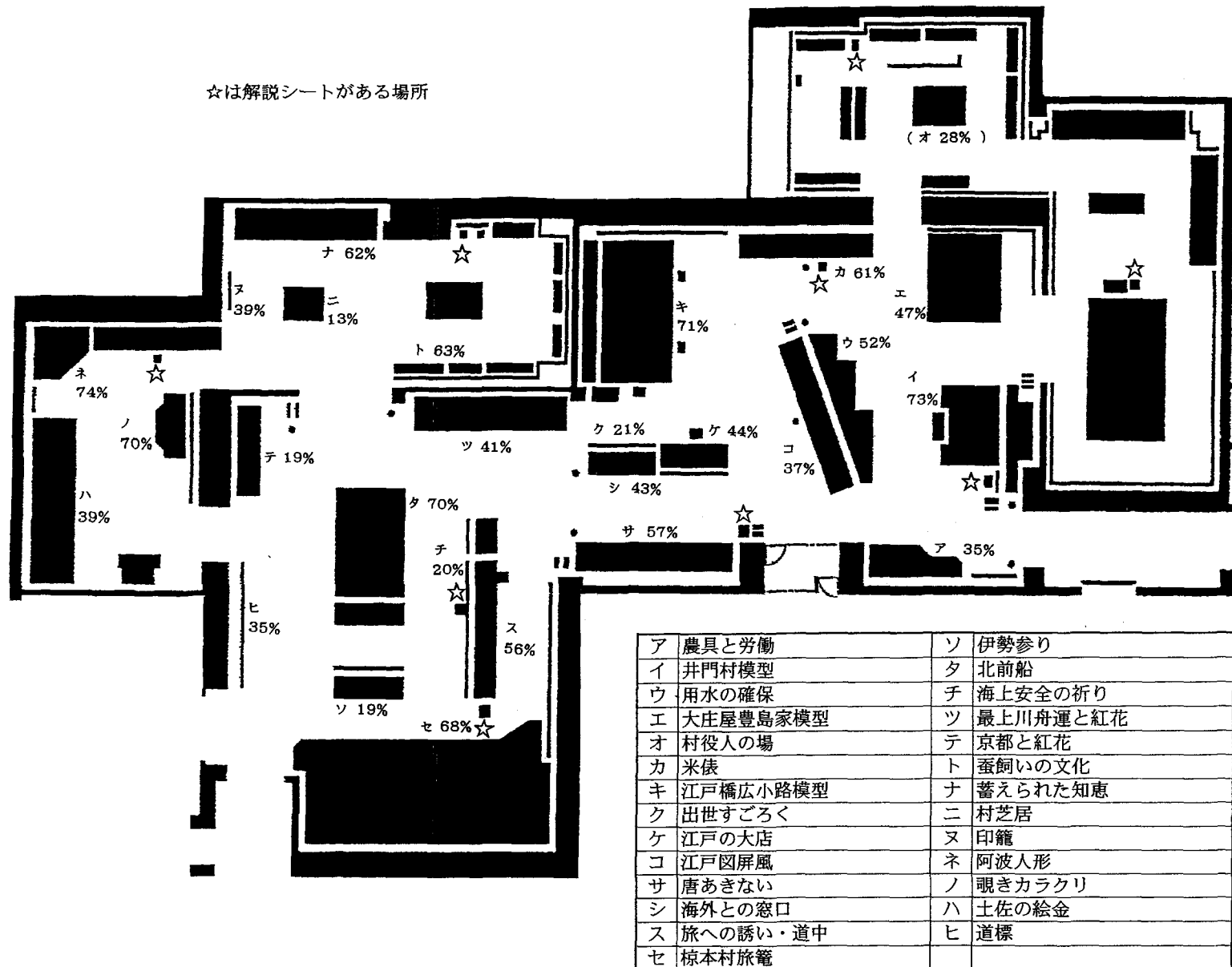


図4 展示の前で立ち止まった人の割合

なっている。展示室の中では、比較的、色も派手で動きが伴う展示であるため、観客の目を引きやすいのかもしれない。井門村耕地模型に最初に立ち止まる人が多いのは、そのような理由と、もう一つはここに解説シートが置かれていることも要因の1つと考えられる。

(2) 副室に入ったか。副室にはどのようなルートでいったか。

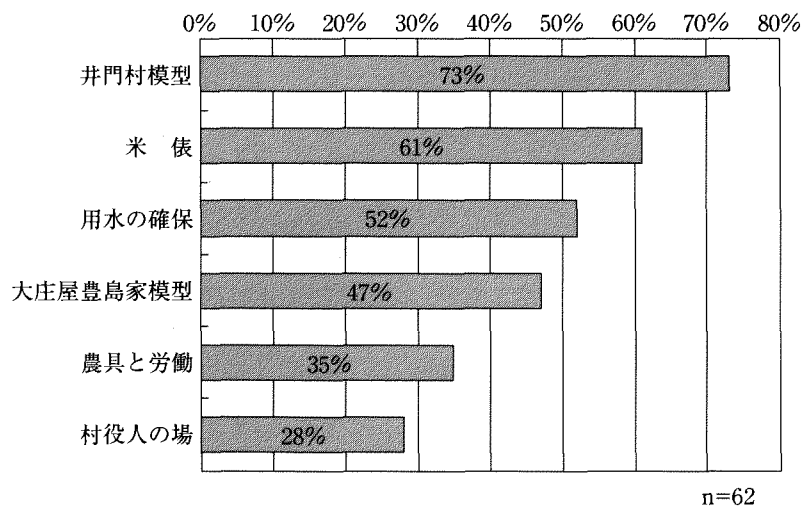
展示室の前半部分に「文書と絵図は語る」というテーマの副室がある。絵図のコーナーには被験者の82%が、文書のコーナーには被験者の74%が中に入った。しかし、絵図のコーナーに入った人の中には、入口付近ですぐに引き返してしまう人もいた。そして文書のコーナーに入った45人のうち6人は「支配のしくみ」の展示と大庄屋豊島家の模型の間を抜けて文書のコーナーに入っているが、大部分は絵図のコーナーの副室からつながっている方から文書のコーナーに入っている。

(3) 展示物および展示コーナーごとの注目度

立ち止まった地点とじっくり観ていた地点を記録していったが、両者を合わせて立ち止まった割合を展示物もしくは展示コーナーごとに示したものが図4である。

〈百姓の世界〉

「百姓の世界」では、立ち止まった割合が最も高い展示が井門村耕地模型で、被験者の73%がこの展示の前で立ち止まっている。次に高い割合を示しているのが、「支配のしくみ」というテーマで展示されている米俵（実物大）の展示である。61%の被験者がこの展示に注目している。続いて、「用水の確保」のコーナーが52%、大庄屋豊島家の模型が47%、「農具と労働」は35%となってい



※「村役人の場」は「文書は語る」に入った人（46人）のうち、村役人の場で立ち止まった人の割合を示している。

図5 展示の注目度 〈百姓の世界〉

る(図5)。

先にも触れたが、井門村耕地模型で立ち止まる割合が高いのは、解説シートが置いてあることが大きく影響していると考えられる。米俵についても、その前に解説シートが置かれているので、そのことが立ち止まる割合を高くしていると考えられる。

〈文書と絵図は語る〉

副室の絵図のコーナーに入った人の割合は82%であると述べたが、その中で生保周防国絵図の前で立ち止まった人は82%と高い割合を示している。国絵図の解説ビデオと解説シートが置かれていることも立ち止まる割合を高くしていると考えられる。

文書のコーナーの中に設置されている村役人の仕事場の様子を再現した「村役人の場」(写真4)はどうであろうか。文書のコーナーに入った人のうち、「村役人の場」で立ち止まった人は被験者の28%にすぎず、低い割合を示した。しかし、文書のコーナーにある「村役人の場」以外のいずれかの展示の前で立ち止まった人の割合は70%であった。

〈都市の繁栄〉

「都市の繁栄」のコーナーでは、江戸橋広小路模型(写真5)と「江戸の本店」、出世双六、江戸図屏風、「唐あきない」、「海外との窓口」の注目度を算出してみた(図6)。江戸橋広小路模型の注目度はこのコーナーでは最も高く、被験者の71%が立ち止まっている。この模型の脇にある越後屋についての展示「江戸の本店」は44%、その隣りにある出世双六はもっと低い21%となっている。出世双六は、拡大したグラフィックパネルを壁面に展示したもので、実際に遊んでみることもできる参加体験型の展示であるが、実際に体験する観客は少ないことがわかった。歴博が所蔵する重要資料の一つである江戸図屏風については、前で立ち止まった人の割合は、わずか37%であった。非常に重要な資料であるにもかかわらず、「都市の繁栄」コーナーにある展示の中で、最も注目度が低いことが明らかになった。「都市の繁栄」では江戸と長崎を取り上げている。長崎に関する展示では、長崎出島の様子を描いた長崎図屏風が展示されている「唐あきない」とその向かい側

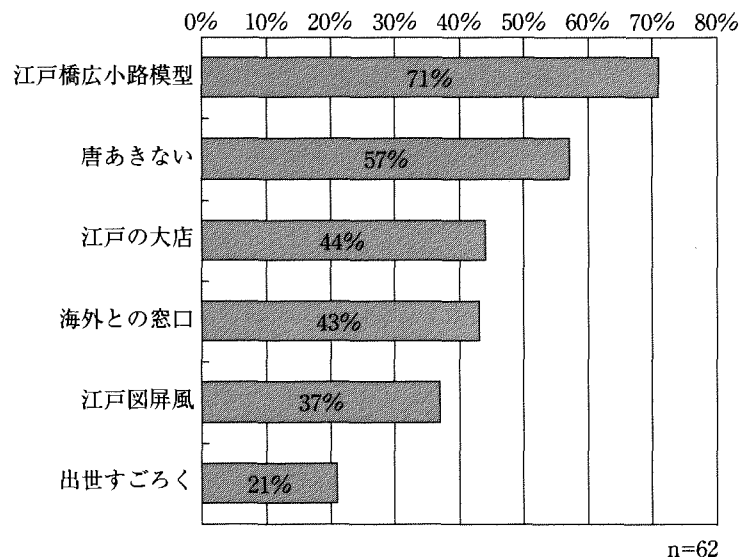


図6 展示の注目度〈都市の繁栄〉



に「海外との窓口」の展示がある。「唐あきない」の展示は被験者の57%、「海外との窓口」の展示はそれより低い43%の人が立ち止まった。同じ長崎における海外交渉を扱った展示であるが、長崎図屏風が展示されている方が注目度が高いのが特徴的である。ただし、本調査では立ち止まったかどうかのみを記録しており、何をみているかは記録していないため、長崎図屏風をみているのか、その下に展示されている絵巻物や交易品をみているのか、あるいは両方みているのかは明らかではない。

〈道と旅〉

第3展示室の後半部分は、「道と旅」からはじまる。長崎に関する展示を通過して左側に進むと庶民の旅についての展示になっており、「旅への誘い」「虎勢道中記」「道中」の展示が一行に並んでいる。図7に示すように、この展示コーナーのいずれかの地点で立ち止まった人は被験者の56%で、この展示の先にある原寸復元された椋本村旅籠（写真6）には68%が立ち止まっている。旅籠の前にある「伊勢参り」の展示は、立ち止まった人の割合が19%とかなり低くなっている。また原寸大の道標が展示されているコーナーには35%の人が立ち止まっている。

海の道に関する展示では、北前船の縮小模型が展示されている。「道と旅」のコーナーの中央に展示されており、その回りを歩きながら見ることができるようになっている。またその周辺には北前船で運ばれた裂き織の着物や舟筆筒、海産物などが展示されている。北前船をみているのか、それらの物資をみているのかは定かではないが、この展示コーナーで立ち止まった人の割合は70%であった。北前船の向かい側の壁面にある「海上安全の祈り」の展示で立ち止まった人の割合は20%で、北前船と比べて注目度がかなり低いことがわかる。

次に、陸と海を結ぶ河川交通を示すものとして、「最上川舟運と紅花」の展示と京都に紅花が運ばれて染料として使われたことを示す「京都と紅花」の展示（写真7）がある。「最上川舟運と紅

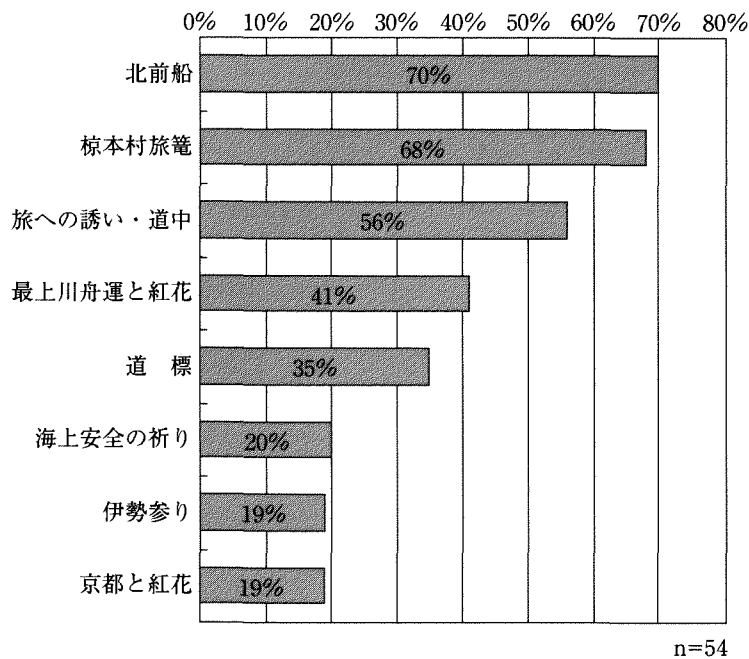


図7 展示の注目度 〈道と旅〉

花」の展示では、立ち止まった人は41%で、庶民の旅や北前船の展示よりも注目度が低くなっている。「京都と紅花」の展示になると、それよりさらに少ない19%となっている。19%の人の中には、その前に置いてあるベンチに座っているだけの人も含まれているので、実際に展示を見た人の割合はもっと少ないと思われる。

#### 〈躍動する民衆〉

「道と旅」に隣接した部屋が「躍動する民衆」のコーナーである。被験者の94%がこのコーナーに入っている。さらに展示コーナーごとに注目度をみてみると（図8）、「蚕飼いの文化」の展示のいずれかの地点で立ち止まった人は63%、「蓄えられた知恵」の展示では62%となっている。同じ部屋にある印籠の展示に限ってみると、39%の人がここで立ち止まっており、村舞台の縮小模型で

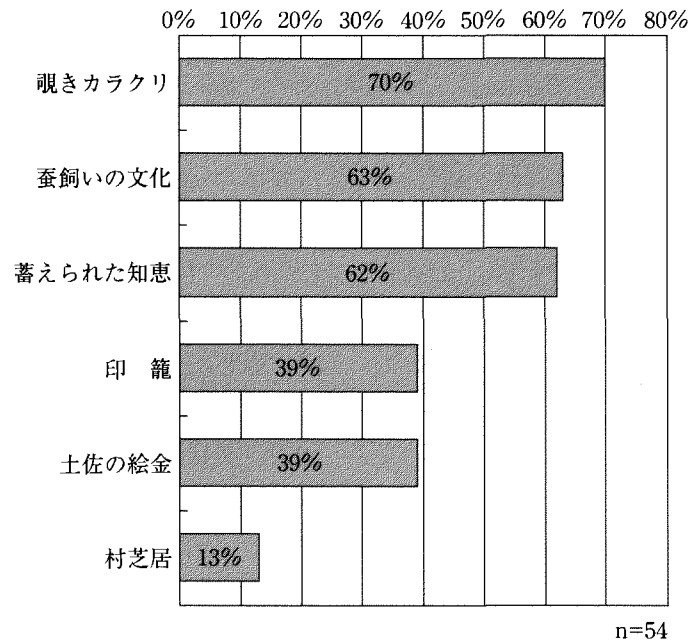


図8 展示の注目度〈躍動する民衆〉

は、わずか13%の人しか立ち止まっていない。「噴出する情念」のコーナーでは、阿波人形の展示（写真8）の前で立ち止まった人が74%、覗きカラクリ（写真9）が70%と高い割合を示しているが、「土佐の絵金」では39%となっており、同じコーナーにある展示の中では低い割合を示している。

#### 観覧動線

観客の観覧動線について、いくつか特徴的なことを述べてみたい。

まず、展示室の前半部分では、副室の絵図のコーナーに入っているかどうか注目してみると、前述したように82%が副室に入っており、主室だけでなく副室も多くの人が見学していることがわかった。これは警備員による誘導が大きく影響していると考えられる。もし誘導がなければ、副室に入る人の割合はもっと低くなるであろう。文書のコーナーには絵図のコーナーから入る人が多いこともわかった。

「都市の繁栄」のコーナーにある江戸図屏風は、前述したように立ち止まる人が37%と少なく、次の長崎のコーナーに行く通過地点として見ずに通り過ぎる人が多いことがわかった。

展示室の前半部分については、比較的視界が開けているためか、動線の混乱は少なく、動線の違いによって見逃してしまいがちな展示もあまりないようである。

「道と旅」ではじまる展示室の後半部分はどうであろうか。展示内容の順序としては、すぐ左に曲がって庶民の旅の展示を見るようにつくられているが、左に曲がる人とまっすぐ進む人がほぼ半数ずつだった。まっすぐ進む人は庶民の旅の展示を見ない場合が多く、動線がもたらした影響と考えられる。それに対して、庶民の旅を先に見た人の方が、「道と旅」のコーナー全体をまんべんなく回っている人が多い。

展示室後半部分は前半部分に比べて、動線が複雑になっており、歩き方によっては見逃してしまう展示が出てしまうようである。

最後に、前半部分と後半部分に共通して言えることだが、解説シートの設置場所が動線に影響していることを指摘することができる。

### 3 記憶・理解度調査

#### 調査の方法

記憶・理解度調査では、第3展示室の中から展示企画担当者が重要と思われる展示物12点を選び、それらの写真を観客に示して、見たかどうか、見た場合はさらにそれが何であるのかを回答してもらった。一般来館者には、第3展示室を見学し終わった直後に調査への協力を呼びかけ、応じてくれた人に調査員が質問した。また同様の調査を教育学部と文学部史学科の大学1年生を対象に行った。教育学部の学生にはすべての展示室を見学した後で、調査票にみずから記入してもらった。文学部史学科の学生には第3展示室で研究部の教員が展示解説を行い、すべての展示室を見学した後で調査票にみずから記入してもらった。

調査を実施した日とサンプル数は以下の通りである。

一般来館者を対象にした調査：2003年3月22日(土)、23日(日)	73件
教育学部1年生を対象にした調査：2003年5月10日(土)	37件
文学部史学科1年生を対象にした調査：2003年5月16日(金)	39件

調査の対象となった展示物は以下の通りである。出題の順番は、展示室に配置されている順序から回答を推測することができないよう、あえて順位不同にした。

- ・伊能図
- ・江戸橋広小路模型
- ・村役人の場
- ・井門村耕地模型
- ・地方測量の図
- ・唐館図
- ・北前船

- ・裂き織の着物
- ・東海道新井宿の食事
- ・紅花で染めた京都の小袖
- ・蚕卵紙
- ・変化朝顔

## 調査結果

### (1) 記憶に残った展示

「見た」という回答は、その展示に対して実際に見る行為が行われたことを意味するとともに、その展示が観客の頭の中に「記憶」されていることを意味する。「見た」という回答が多かった展示、すなわち観客の記憶に残った展示は何で、逆に「見ていない」展示、記憶に残っていない展示は何であろうか。図9、10に示すように、江戸橋広小路模型と北前船が、一般来館者、教育学部学生、史学科学生すべてにおいて12点の展示物で最も「見た」という回答が多かった。江戸橋広小路模型を「見た」人の割合は、一般来館者が92%、教育学部の学生が78%、史学科の学生が97%となっている。北前船については、一般来館者が85%、教育学部学生が84%、史学科の学生が97%となっている。次に「見た」という回答が多いのが、伊能図と井門村耕地模型で、伊能図については、一般来館者の62%、教育学部学生の70%が「見た」と答えている。史学科の学生については、「見た」と回答した人が95%にもものぼっている。井門村耕地模型については、一般来館者の68%、教育学部学生の62%が「見た」と回答し、史学科の学生はこれよりも高い90%が「見た」と回答している。

一方、「見た」という回答が少なかった展示は何であろうか。これは本当に見ていないか、記憶に残っていないかのどちらかということになるが、蚕卵紙と京都の小袖が一般来館者、教育学部学生、史学科学生ともに「見た」と回答した人が少なかった。蚕卵紙は一般来館者で27%、教育学部学生で22%、史学科学生で8%にとどまっている。京都の小袖は、一般来館者が34%、教育学部学生が38%、史学科学生が10%となっている。他に「見た」と回答した人が40%に満たなかったものを挙げると、一般来館者では唐館図が23%となっているが、これは写真の鮮明度が悪かったため、資料を認識できず、数値を引き下げてしまったと考えられる。教育学部と史学科の学生に調査したときは、より鮮明度の高い写真を用いたため、一般来館者より「見た」と回答した人の割合が多くなっている。教育学部の学生では、地方測量の図と裂き織の着物が、「見た」と回答した人がそれぞれ30%と35%で低くなっている。史学科の学生では、京都の小袖(10%)と蚕卵紙(8%)、「村役人の場」(5%)、地方測量の図(23%)、裂き織の着物(31%)が「見た」と答えた人の割合が低くなっている。

「見た」という回答の割合は、図9と図10に示すように、一般来館者と教育学部の学生は比較的傾向が似ているが、史学科の学生の回答結果の傾向は異なっていることがわかる。史学科の学生の回答では、「見た」ものについては非常に高い割合を示しているが、「見ていない・覚えていない」ものはかなり低い割合となっており、「見た」ものと「見ていない」ものの開きが大きいのが特徴である。これは展示解説の内容に影響を強く受けており、解説があったものだけを見ていることに

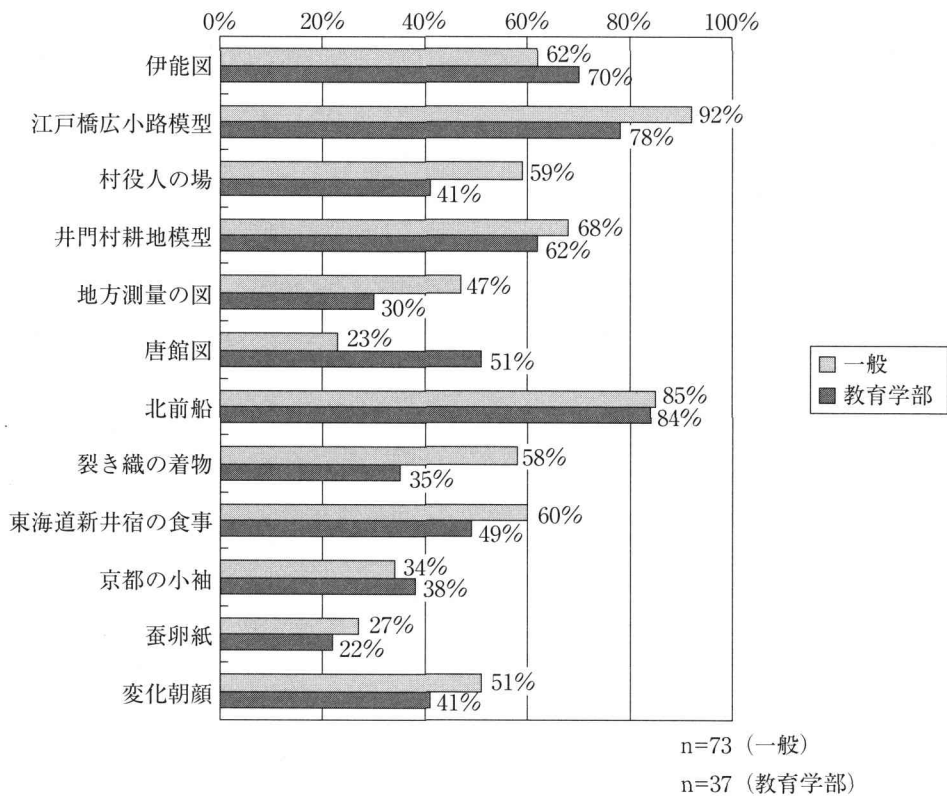


図9 「見た」と回答した割合 (一般来館者・教育学部学生)

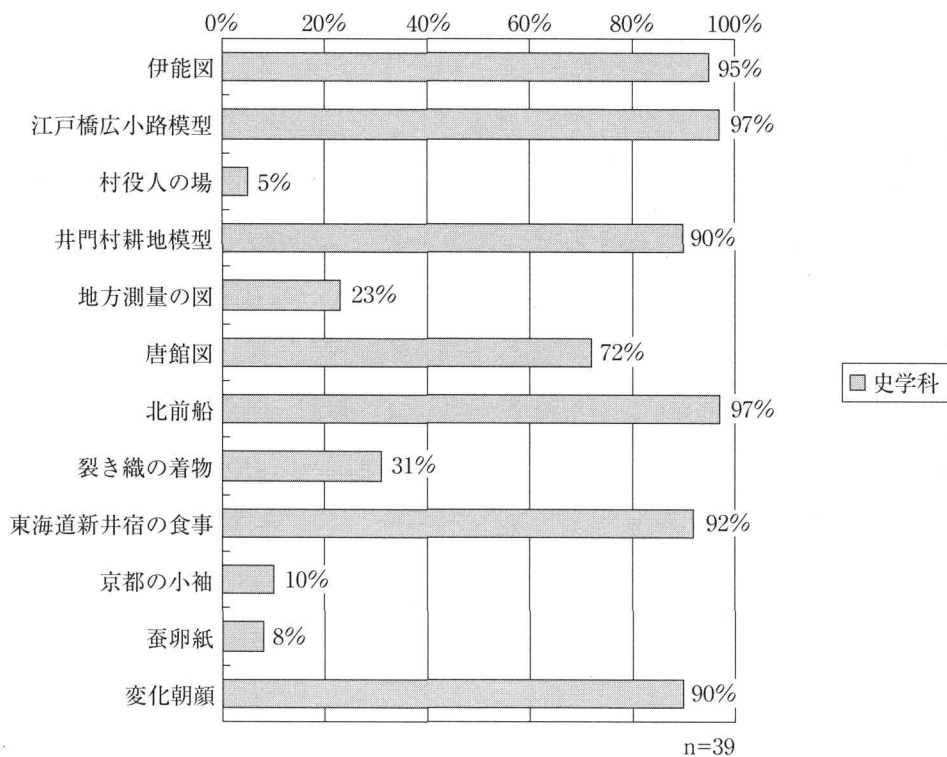


図10 「見た」と回答した割合 (史学科学生)

よると推察できる。

(2) 「見た」展示についてどのように理解しているか

展示を「見た」ということは、その展示を「記憶」しているということであるが、それは、その展示について正しく理解しているわけでは必ずしもない。展示物によって企画者が意図した通り理解されているものとそうでないものがあった。

「見た」と答えた割合が最も多い江戸橋広小路模型は、ほとんどの人が江戸の町並みであることを理解していた。「日本橋」という単語を使っている人も多かった。江戸ではなく、大阪、水戸、千葉の港と答えている人も若干名いた。同じく「見た」と答えた人が多い北前船は、史学科の学生のほとんどは北前船と答えているが、一般来館者と教育学部の学生は、「北前船」と答えたのは3分の1以下だった。その他の回答は、一般来館者の場合は、「万福丸」、「貿易に使った船」、「長崎から出た船」、「日中貿易の船」、「金毘羅の船」など様々な回答があった。教育学部の学生の場合は、「朱印船」と答えている人と「船」という一般名詞を使っている人がそれぞれ約3分の1であった。

伊能図については、教育学部の学生と史学科の学生はほとんどが伊能図と答えており、史学科の学生の場合は伊能忠敬とフルネームで答えている人が多かった。それに対し、一般来館者は、伊能図と答えられたのは約半数で、一般名詞の「地図」や「日本地図」という回答が合わせて約半数だった。

井門村耕地模型については、史学科の学生のほとんどが「水田の水路の模型」「水田への水の引き込み方」「農村の水の流れ」など、具体的な言葉で表現している。教育学部の学生の回答を見ると、「灌漑用水」「水路」「水田」「川の流れ」など一つの単語で答えている人が多い。一般来館者の場合は、「見た」と答えた人の約半数しかその展示が何であるか答えていない。被験者の中には「見たのですが、色のついた電灯が沢山わっついているのに目を奪われて何だかは忘れてしまいました」と答えている人もいる。その他の回答を見ると、「水の流れ」「川の流れ」「水田の水利」「かんばつ、洪水」「水田への川の供給の様子」など意味を正しく理解していると思われる表現のほかに、「水田」「田んぼ」「農村」など、模型が示しているテーマと直接関係のない回答をしている人もいた。

裂き織の着物は一般来館者の58%が「見た」と答えているが、それが何であるか回答した人は42人中14人で何も答えていない人が目立った。回答の内容を見ると、「着物」「農民の服」「庶民の着物」「船に積まれていたもの」など、「裂き織」という言葉を使った人は一人もいなかった。教育学部の学生も回答した人は14人中4人だけで、「船につままれていたもの」「百姓の服」「平安時代の衣服」「服」という回答で、「裂き織」と答えられた人は一人もいなかった。史学科の学生も同様に、「裂き織」という言葉を使った人はいなかった。

#### 4 考察

第3展示室における観客の〈行動〉、〈記憶〉、〈理解〉について2種類の異なる調査からその分析結果を見てきた。第3展示室における観客の観覧行動を分析するにあたって、歴博の展示全体にお

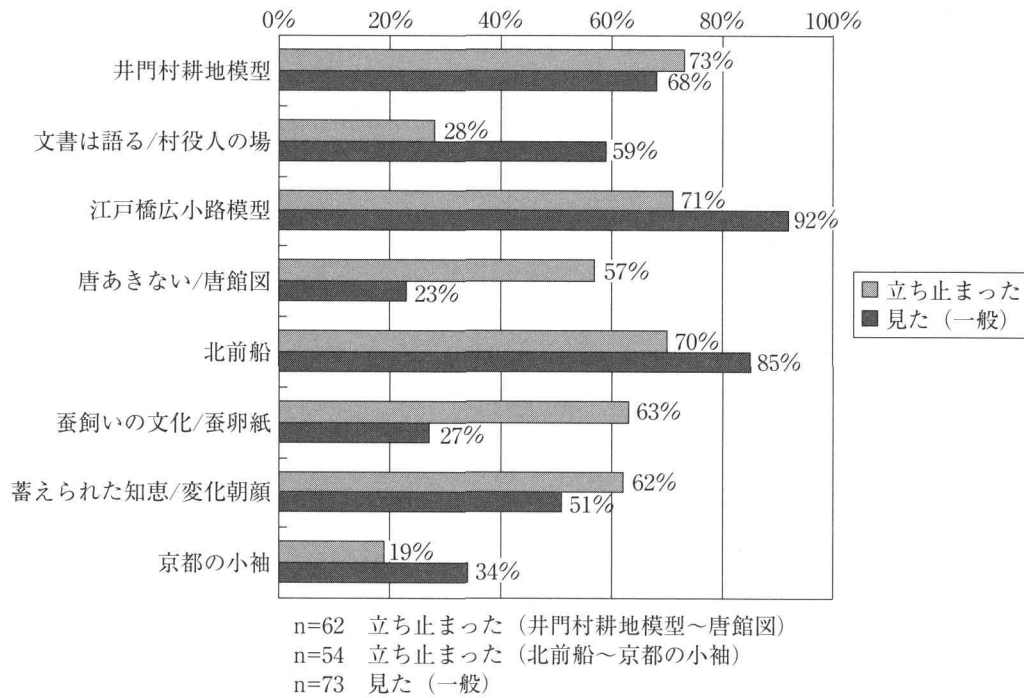


図11 立ち止まった人の割合と「見た」と回答した人の割合

ける第3展示室の位置づけを考慮に入れる必要がある。展示室の見学順路と滞在時間についての調査結果からも、ほとんどの観客は展示室を第1展示室から第5展示室にかけて、順番に見学していることがわかっている。そのなかで第3展示室の平均滞在時間は18分となっており、第1展示室の36分、第2展示室の27分と比べて短くなっている [宮田・竹内・安達2003]。このような状況下で、つまり観客の「博物館疲労」が表れていることを考慮に入れて、今回の調査結果を解釈する必要がある。

まず、観客の行動と記憶の関係について考察してみたい。すべての展示で比較したわけではないが、展示の前で立ち止まっていなくても記憶に残っていることがわかった。図11に示すように、「村役人の場」、江戸橋広小路模型、北前船、「京都の小袖」ともに、立ち止まった人の割合より「見た」と答えた人の割合の方が高くなっている。井門村耕地模型では、ほぼ同じ割合を示している。その他の「唐あきない/唐館図」、「蚕飼いの文化/蚕卵紙」、「蓄えられた知恵/変化朝顔」では、「立ち止まった」人と「見た」人の割合が逆転しているが、これは、立ち止まった地点が特定の展示物を対象にしているのではなく、コーナー全体を対象にしているために起こった逆転現象といえる。

本論文で取り上げた2つの調査は、観客の〈行動〉と〈記憶〉〈理解〉に注目したものだったが、観客が立ち止まった割合と「見た」割合が高かったものは、ほぼ共通していることがわかった。江戸橋広小路模型と北前船、井門村耕地模型である。記憶・理解度調査では対象にしなかったが、動線調査では阿波人形、覗きカラクリ、椋本村旅籠も立ち止まった割合が非常に高く、注目度が高い展示といえる。覗きカラクリと旅籠については、原寸大の模型で、参加・体験的な要素がある、阿波人形については人形の顔を浮かび上がらせるような照明効果が劇場的な雰囲気を演出しているな

どの特徴がある。これらのものは観客の目を引き付けやすく、強いインパクトを与えていることが推察される。本論文では詳しく取り上げなかったが、江戸橋広小路模型と北前船、椋本村旅籠については、「教師から見た評価」の調査でも評価が高かったことを付け加えておく。

反対に注目度が低かった展示は、出世双六、京都の小袖、「村役人の場」、蚕卵紙、「農具と労働」、「伊勢参り」、「海上安全の祈り」であった。歴博の目玉展示の1つである江戸図屏風でさえも観客の注目度はかなり低かった。記憶・理解度調査で、分析の対象として取り上げた「村役人の場」と蚕卵紙、京都の小袖は、展示担当者が特に重要な展示物として選択したものであるが、観客の多くは見てもないことがわかった。江戸図屏風の注目度の低さもそうであるが、展示企画者の意図と観客の見方との間に違いがあることを指摘することができる。江戸図屏風についてさらに言えば、「教師から見た評価」の結果では、15ヶ所の展示コーナーのうち上位4位に入っており、評価が高いのとは対照的である。

観客の理解度については、立ち止まった人、見た人の割合が高かった北前船を例に挙げると、「北前船」という名称で答えられなかった人が多いことから、「江戸時代に物資を運んだ船」というように漠然と理解している人が多いことがわかった。また裂き織の着物については、見た人は半数強いるが、古木綿の着物を利用した裂き織であることを理解している人はほとんどいなかった。記憶していても展示の企画者が伝えたかった通りには理解していないことを示している。

さらに展示の配置が観覧行動に与える影響について触れたい。歴博の展示では、解説シートが置いてある場所が観覧動線を決める大きな要因になっていることが浮き彫りになった。すべての観客が解説シートを集めているわけではないが、少なくないことは事実である。解説シートがどのような効果をもたらしているのか、またそうでないのかを検証する必要がある。

また、注目度の高い展示物の周囲にあるものは、それとは反対に注意を引きにくい傾向があることがわかった。注目度の高い江戸橋広小路模型の周囲に展示されている、江戸図屏風をはじめ、出世双六、「江戸の本店」の注目度が低いのは、そのような理由によるものと考えられる。

動線については、「道と旅」のコーナーは動線が複雑であり、そのために観客が見過ごしてしまう展示があることがわかった。歴博では、観客に自由に観てもらうために動線を決めない自由動線を方針としているが、展示の配置や内容が必ずしもそのようになっていないので、展示企画者が想定した順路で見ないと、展示の流れがつかみにくくなってしまふ。この点も改善する必要がある。

以上の調査結果から、展示の特徴として特筆すべき事項をまとめると以下ようになる。

- ①立ち止まって見ているものは記憶に残りやすい。
- ②立ち止まって見ていなくても記憶に残っている場合がある。
- ③記憶に残っていても企画者の意図通りに理解しているとは限らない。
- ④原寸大模型、縮小模型、参加型の展示、演出効果をほどこした展示は注目度が高い。
- ⑤注目度が高い展示の周囲にあるものは注目度が低くなる傾向がある。

歴博の近世展示は、古代、中世、近代の展示に比べて、文書や絵図など平面資料が多いことが特徴でもある。観客の注目度に関していえば、屏風をはじめ、文書や絵図などの平面資料と模型、特に、大型の復元模型との注目度の差がはっきりと現れる結果となった。模型を多用し、それを特徴としてきた歴博の展示が観客にも好意的に受け入れられていることの表れでもある。参加型の展示



については、注目度の高かった覗きカラクリと出世双六があるが、出世双六は同じ参加型でも注目度が低くなっている。注目度の高い江戸橋広小路模型の隣りにあることも一因と考えられるが、双六を実際に楽しむことができるような工夫を行うなど、改善の余地があるのではないだろうか。

## むすび

第3展示室の評価を行なうにあたり、展示評価の方法として広く採り入れられているトラッキング調査と質問票による記憶・理解度調査を行なったが、これは観客が展示を「観る」体験の一側面を分析したもので、この調査結果をもって観客の体験のすべてであると決めつけることはできない。観客調査によってわかるのは、あくまでもある条件下でのある範囲内における傾向であり、より観客の体験に真に迫ろうとするのであれば、いろいろな方法で、調査をする必要がある。今回の調査では観客の〈行動〉・〈記憶〉・〈理解〉に注目したが、行動観察からは歩いて通り過ぎていただけのように見えても、観客の記憶には残っている場合もあることから、観客の行動からだけでは展示物を見ているか、見ていないかを正確には判断できないことがわかった。冒頭にも述べたように、行動主義の考え方にもとづく分析だけでは、観客の体験を真に理解できないということである。行動観察と質問票による調査を組み合わせることが有効であることがわかった。

さらに、今回の調査では展示を見た直後の記憶や理解について調査したが、観客の体験について総合的に理解するには、歴博で展示を観たことがその観客に与えた長期的な影響も追跡する必要がある。

今回の調査についても、サンプル数をもう少し増やし、年代別の分析を行なうとか、記憶・理解度調査で取り上げた12点の展示以外の展示を対象にしてみるとか、まだまだ調査自体を発展させることも可能である。最初から大規模な調査に取り組まなくても、これくらいの規模の調査でもある程度傾向を把握することは可能であるし、このような調査方法が有効であることも確認することができた。

言うまでもなく、展示評価のしかたは1つではない。1つの方法で結果を決め付けてしまうのは好ましくないし、何を知りたいのかという目的に応じて評価の手法を使い分けることが重要であろう。

さらに展示評価を行うにあたっては、評価者と展示企画者との綿密な意見交換が重要となる。今回は展示企画者が何を伝えたいのか、何を覚えてもらいたいのかということや観客の評価結果を企画者自身がどのように受け止めているかについては詳しく触れることができなかった。これについては、第3展示室のリニューアルという現実の計画の中で、今後さらに議論を続けていく予定である。

本論文で取り上げた展示評価の方法がどの博物館でも適用でき、ふさわしいものであるとは限らない。博物館の規模によっても大きく異なるであろう。歴博のような大規模館においては、館の機能が分化されており、研究者の研究志向が高く、教育普及などの博物館活動に携わる人が限られているため、観客調査も研究者自身ではなく別の担当者が行なっている。日常的に学芸員が展示室に足を運び、観客と接しているような小さな博物館では、観客の反応を経験的に把握できれば十分であることも確かである [宮本2002]。展示評価や来館者研究が、わが国にも波のように押し寄せているが、それぞれの館にふさわしいやり方で観客について知っていくことが重要であろう。

最後に、今回取り上げた理解度調査は、企画者が見せたいものや伝えたいことと観客の受け止め方との間にギャップがあるかどうかという観点から調査したものであるが、展示を自由に観る権利が観客にあるという大前提に立つ必要がある。いわゆる学校での教育（フォーマルエデュケーション）と違い、博物館の到達目標は多様であり、対象とする観客の年齢も知識や興味の度合いも様々であるため、到達目標に対する達成度による評価はそもそも博物館にはなじまない。それは博物館の展示を評価する一側面にはなり得てもすべてではない。むしろ、インフォーマルな学びの場として、観客の自由な選択や解釈を誘発していくことこそが博物館の展示が持つポテンシャルであり、強みであるといえる。そのような企画者が予期しないような多様な受け止め方も含めて観客の体験について研究していく必要があろう。ポストモダニズムやポストコロニアリズムの考えにもとづけば、博物館が何を伝えるかではなく、観客が何を学んだのか、何を獲得したのかに重点を置いた観客研究が重要になっていくであろう。

#### 謝辞

本論文を執筆するにあたり、当館の久留島浩教授には、観客研究という視点から多くの有益な助言をいただき、また、調査方法等の検討にあたっては、安達文夫教授、小島道裕助教授から多くの助言をいただいた。ここに感謝の意を表したい。そして、ここには名前は挙げないが、調査に携わってくれた方々にこの場を借りて改めて感謝したい。

#### 註

- (1)——展示評価調査に関わる館内組織としては、観客調査プロジェクトと第二期展示委員会を引き継いだ第二期展示第3室リニューアル展示プロジェクト会議、リニューアル委員会がある。また研究組織としては、共同研究「歴史展示における『異文化』表象の基礎的研究」（研究代表者 久留島浩歴史研究部教授）、総合研究大学院大学学長プロジェクト「市民への研究成果公開におけるオーディエンスの理解の研究」（研究代表者 安達文夫情報資料研究部教授）がある。調査研究の成果はそれらの諸組織の業務及び研究に反映されることになっている。
- (2)——以下、特に記さない限り、展示コーナー名には「       」を付した。

#### 参考文献

- 『国立歴史民俗博物館第三者評価報告書—展示を中心として—』国立歴史民俗博物館 1998年  
久留島 浩「これからの歴史系博物館について」地方史研究協議会編『21世紀の文化行政—地域史料の保存と活用—』名著出版 2001年 pp.33-63  
篠原 徹「不思議な場としての博物館」『民俗展示の構造化に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館 1988年 pp.25-33  
橋本裕之「物質文化の劇場—博物館におけるインターラクティブ・ミスコミュニケーション—」『民族学研究』第62巻4号 日本民族学会 1998年 pp.537-562  
三木美裕「博物館・美術館の来館者研究—アメリカの事例から—」『国立民族学博物館研究報告』第24巻3号 国立民族学博物館 2000年  
宮田公佳・竹内有理・安達文夫「展示改善にむけた観客調査の設計と実施：見学順路と滞在時間から見た観覧行動の解析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集 2003年 pp.321-352  
宮本裕次「博物館における展示評価」『地方史研究』第300号 地方史研究協議会 2002年 pp.74-80  
村田麻里子「来館者研究の系譜とその課題—日本における博物館コミュニケーションの展開のための一考察—」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第7号 2003年 pp.95-104  
アイリーン・フーパググリーンヒル氏へのインタビュー「来館者とは能動的なインタープリター 博物館は充分な解釈学的哲学を持つべき」『Cultivate』No.19 文化環境研究所 2003年 pp.10-17  
Bicknell, S. and Farmelo, G. (ed), *Museum Visitor Studies in the 90s*, Science Museum, 1998

- 
- Diamond, J., *Practical Evaluation Guide: Tools For Museums & Other Informal Educational Settings*, AltaMira Press, 1999
- Falk, John H. and Dierking, Lynn D., *Learning from Museums: Visitor Experiences and the Making of Meaning*, AltaMira Press, 2000
- Hooper-Greenhill, E., 'Education, communication and interpretation: towards a critical pedagogy in museums', Hooper-Greenhill, E. (ed), *The Educational Role of the Museum*, Routledge, 2nd edition 1999 pp. 3-27
- Hooper-Greenhill, E., *Museums and the Interpretation of Visual Culture*, Routledge, 2002

(国立歴史民俗博物館研究機関研究員)

(2003年6月2日受理, 2003年7月18日審査終了)

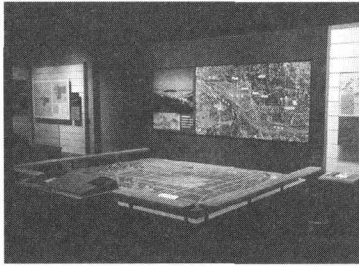


写真1 井門村耕地模型

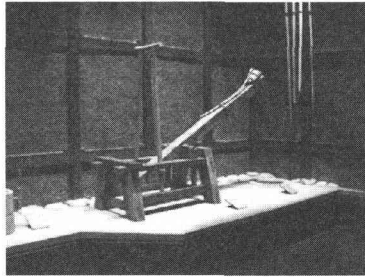


写真2 「農具と労働」

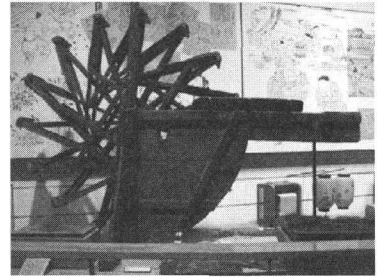


写真3 「用水の確保」



写真4 「村役人の場」

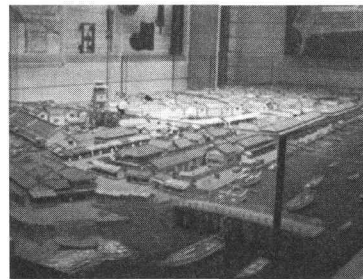


写真5 江戸橋広小路模型

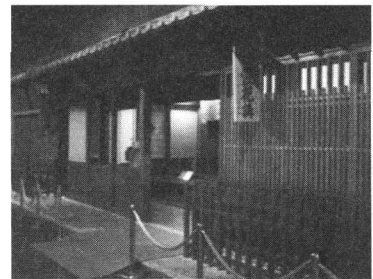


写真6 棕本村旅籠

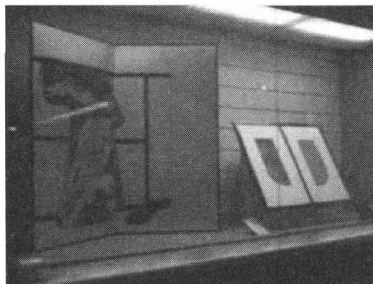


写真7 「京都と紅花」

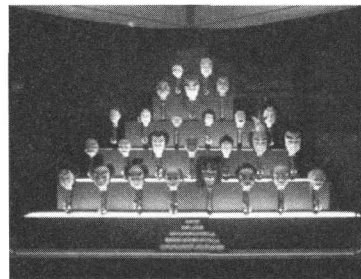


写真8 阿波人形

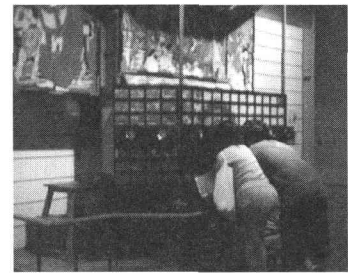


写真9 覗きカラクリ